

微細な差異に敏感になること

土肥 いつき

DOHI Itsuki

公立高校教員

残り半分との出会い

1997年、私はあるきっかけがあつて同性愛について勉強をはじめた。そんなある日、レズビアンの人の講演を聞くために電車に乗っていると、Kという在日コリアンの生徒とたまたま出会つた。「先生、どこに行くの?」「今からレズビアンの人の話を聞きに行くねん」。するとKは「実は私もそうなんや」と話してくれた。1994年、私は京都で在日外国人学生交流会を立ちあげた。Kは交流会の1期生であり、毎回の交流会に出席し、自分の在日コリアンとしての経験を積極的に語っていた。そんなKの姿を見ていた私は、Kのことをまるごと知っている気になつていて。しかし、私には語っていないことが実はあったということを、その時はじめて知つたのである。Kは「先生、これで私の残り半分を知つたんやね」と笑つた。

こんな出会いもあつた。2002年、被差別部落の中にある人権NPOの研修を受けた時のことである。とてもジェンダー・センシティブな研修だったので、講師のMさんに「さすがですね」と言うと、「いやあ」と謙遜された。その後、打ち上げに向かう道すがら、たまたまふたりきりになったタイミングを捕まえて、Mさんは私に言われた。「実はね、ボク、ゲイなんです」。そしてこう続けられた。「部落とゲイの両方を知つてるのは、いつきさん、世界であなただけです」。これまで誰にも「残り半分」を言えなかつたMさんが、はじめて「まるごとの自分」を見せる相手に私を選んでくれたことにうれしさを感じるとともに、部落とゲイというダブルマイノリティの重さを、あらためて思い知らされた。

ホームの力

私は、これまでにさまざまな交流の場所にかかわってきた。関西医科大学附属病院のジェンダークリニック受診者の会である「まんまるの会」やトランスジェンダー生徒が集まる交流会、性的指向や性自認にかかわらない集まりである「カフェ玖伊屋」などがそれである。これらの集まりに共通しているのは「場」である。まんまるの会は精神障害者の福祉サービスをおこなっているスローフードの店を、カフェ玖伊屋は京都市内にある在日コリアンの民族文化運動の拠点である建物を、そしてトランスジェンダー生徒交流会は大阪市内にあるH地区という被差別部落の中にある集会所を、それぞれ借りておこなっている。いずれも被差別の立場にある人が大切に守り育ててきた場所、まさにその人たちの「ホーム」である。そんな「ホーム」を使わせてもらうからこそ、さまざまな出会いがある。「まんまるの会」では、お店で働いておられる精神障害者の方が私たちを見て「あの人ら、たいへんそうやなあ」と奥の方で言っておられるのを聞き、参加者一同「いやいやいや」となったこともある。カフェ玖伊屋では、同じ建物の1階で識字教室の宴会をしていて、「食べられないから食べて」と、突然大量の韓国料理の差し入れがあったこともある。

集まりをするたび、私はそんな「ホームの力」に守られていることを感じる。それはきっと私だけではない。2007年、大阪市はトランスジェンダー生徒交流会が使わせてもらっていたH地区の人権交流センターの廃館を検討した。H地区の人たちから「大阪市との交渉の場に来てほしい」と言われたが、私はどうしてものはせずない用事があり行くことができなかつた。そこで、交流会の卒業生のYに行ってもらうよう頼んだ。Yは交渉の場で「ここは私たちにとっては単なる貸し館ではないんです。H地区の人たちが私たちのことを受け入れてくれているから、ここで交流会ができるんです。ようやく見つけた私たちのホームを奪わないでください」と言ったという。後日、Yは「H地区の人が『よう言うてくれた』って言って、ごはん食べにつれて行ってくれた」とうれしそうに話してくれた。その後YはH地区の子ども会に指導者として参加するようになった。「子どもから『男？ 女？ どっち？』って聞かれるんですよ」とYは笑っていた。

自己を語る

よくセクシュアルマイノリティの特異性を説明する時に「例えば在日外国人や部落の子

どもにとって、自分の親は同じ在日外国人や部落である。しかし、セクシュアルマイノリティの親はセクシュアルマイノリティではない」と言われる。確かに、そうであるがゆえにセクシュアルマイノリティにとって親へのカミングアウトはハードルが高い。しかし、「カミングアウト」の先を考えた時、その特異性は特異性たり得るのかとも考える。

このことをはじめて教えてくれたのは、2000年頃に京都にあった日本籍朝鮮人の集まりである「パラムの会」だった。ある人が朝鮮人であるとはどういうことなのか。それは国籍なのか。であるならば「日本籍朝鮮人」は存在しないことになる。では親のルーツなのか。であるならば日本と朝鮮のふたつのルーツを持つ人はどうなるのか。あるいは名前なのか。しかし例え日本名を名のっていたとしても、それは糺余曲折の結果としての日本名である場合もある。パラムの会は「ひとくくりにできない存在としての日本籍朝鮮人のありようは、延々と自己を語る以外方法はない」とし、それを「叙述的自己表現」という言葉であらわした。まさに、日本籍朝鮮人内部にも差異があり、「日本籍朝鮮人」というくくりそのものが意味をなさないということを、パラムの会はその活動を通して明らかにしたのである。

2008年、敗戦後日本に進駐していたアメリカ人軍属を祖父に持つTや、日本人の父親とパラグアイ人の母親を持つボリビア生まれのUとともに「ゼンコー卒業生の会」を立ちあげた。「ゼンコー」とは年1回開催される「全国在日外国人生徒交流会」の略であり、「ゼンコー卒業生の会」はそのゼンコーに参加した卒業生やその友だちが集まる「場」である。例えば在日コリアンの生徒が高校卒業後、同胞の集まりに参加したいと考えた時、いろいろな民族団体の青年組織がある。中国人やフィリピン人やブラジル人の子どもにとっても、組織はないがコミュニティはある。しかし、TやUのようなマージナルな存在にはコミュニティはあるか、「同じルーツ」を持つ人すらない。私は、そんなTやUが「帰れる場所」が必要だと考えたのである。

しかし考えてみると、TやUに限らず、例えば同じ在日コリアンであっても1世と2世ですら価値観が大きく異なる。あるいは、新渡日（ニューカマー）の子どもの中には親と言語が異なり意思疎通が困難な場合がある。それどころか、きょうだいの間でも、上の子どもは親と母語で会話ができるが下の子どもは母語が理解できないというケースもある。実は「親が同じであるかどうか」という単純な話ではない。他から見れば同じカテゴリーとみなされても、実はそのカテゴリー内には差異が存在するのである。

微細な差異に敏感になること

では、同じカテゴリーですら共有できない経験や価値は、結局は誰とも共有できないものなのかな。

ゼンコ一卒業生の会に参加したある教員が「交流会は外国人のかかえる問題について話す場所だから、セクシュアリティのことを持ち込むべきではない」という主張を繰り返したことがある。それに対して、ある卒業生が、「交流会に参加していた友だちが、卒業してから『実は自分はゲイなんだ』と話してくれた。外国人の中にもセクシュアリティで悩んでいる人がいる」と返した。それでもなお自分の主張を繰り返すその教員に対して、先に述べたTは猛然と吼えた。「いつきちゃんはオレやねん！」。後にTはその意味を「オレは『アメラジアン*』という言葉と出会うまでは、自分を表現する方法を知らなかった。『アメラジアン』という言葉と出会って、はじめてアメラジアンとして生きることができるようになった。それは『トランスジェンダー』という言葉と出会ってようやく自分のことを表現できるようになったといういつきちゃんと一緒にねん」と話してくれた。TやUの「ホーム」として立ちあげたはずのゼンコ一卒業生の会は、私にとってのホームでもあることを感じた瞬間だった。

*広義でアメリカ人とアジア人との間に生まれた子どもを意味する言葉として使われてきた。

私は、KやMさんたちとの出会いを通して、人をひとつの属性でしか見ないことは、「残り半分」を不可視化するということを教わった。では、「残り半分」が言える場はどのようなものだろうか。それを教えてくれたのがTやUのような存在である気がする。微細な差異に敏感になると、同じカテゴリー内であっても経験や価値は共有できなくなる。しかし、微細な差異に敏感になると、異なるカテゴリー間に思わぬ共有点を見いだすこともある。そんな微細な差異に敏感な「場」こそが、カテゴリーにこだわりながらもカテゴリーから自由でいられる、しなやかな「ホーム」となるのではないだろうか。

土肥 いつき（どひ いつき）

公立高校教員、大阪府立大学博士後期課程在籍中。人権教育には長くかかわっているが、性教育はシロウト。なのに、なぜか『季刊セクシュアリティ』に文章を書かせてもらうのは3回目。でも、「性教育は人権教育」と本人はなんとななく納得している。かかわった本は『トランスジェンダリズム宣言』(社会批評社、2003年)、『セクシュアルマイノリティ』(明石書店、2003年)、『にじ色の本棚—LGBT ブックガイドー』(三一書房、2016年)など。

